
転校生改造宣言

ブッチャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転校生改造宣言

【Nコード】

N9332H

【作者名】

ブツチャー

【あらすじ】

学校では恐怖と皮肉まじりに赤鬼と呼ばれている不良の蒼司。自分を認めてくれた先輩の言葉がきっかけで、不良を止め友達でも作ろうと頑張ってみるが、時既に遅く友人一人作れないまま高校三年生になってしまう。

先輩は卒業し、今後も友達が出来そうな気配が無い。いつそ学校を辞めようかと思っていた矢先一人の転校生が来る。自分に少し似ている不器用な転校生を前に蒼司は、ある宣言をした。

プロローグ

田宮 雪が転校して来て半月が過ぎた。

そろそろクラスにも打ち解けて来たかと言うと、全く逆。相変わらず友達の一人も居ない。

たまに世話好きな奴が話し掛けても田宮は無視か睨みを効かす。

それに加え、赤く染めた長髪とケバい化粧をしているとなれば友達なんか出来る訳が無い。

そして友達が出来ないと変わりに出来るのが悪い噂だ。

なんでも田宮 雪は族の頭の女らしく、誰とでもやるような素敵な女らしい。

その他にも、父親が麻薬中毒者でヤクザだとか母親は鬱で自殺したとかしないとか。

まともに田宮と話した奴は居ないってのに。何で分かるんですかエスパイですか、そうですかって感じで田宮の噂はあつという間に広がった。

そんな噂に田宮は弁明する訳でも無く、庇う者もない。

そうなると思われてくるのが馬鹿だ。

「な、今日帰りメシ行かね？」

「……………」

別のクラスの馬鹿がわざわざ昼休みにやって来て田宮へ声を掛けて
いる。

誰とでもやる。噂が広まって五日目。声を掛けた男は、これで三人
目だ。

「ちょっとつめーもん出す店あんだ」

「……………」

「……………なんか喋ろーよ。つまんねーし」

「死ねば」

くくっ。相変わらず愛想の欠片もねー。

「な!?! ふざけてんなよお前!」

馬鹿はプチキレして田宮にいきり立った。

「あっははは! 死ねはねーよな死ねは」

「そ、蒼司……………さん」

「話し聞いちゃった。席が隣りだから仕方ねーよな?」

「は、はい」

「で、俺の安眠を妨げたお前は、まだ此所に居るつもりか？」

「す、すみませんでした！！」

馬鹿は顔を真っ青にして教室を飛び出していく。

この一連のやり取りを見ていたクラスの奴らは、俺がチラッと見ると一斉に目を逸す。何もしてないってのにだ。

「……………ち」

田宮と俺の共通点。それは、友達が一人もいねー事。

「くだらね」

俺は再び机に顔を伏せ、眠りの国へと向かう事にした。

『蒼司君は優しい子だよ』

一年前、世話になってる先輩に挨拶へ行こうとした時、たまたま先輩の聞こえた教室内の会話。

『でも先週だって駅裏で新高のやつら相手に暴れたじゃん？ しかも理由が犬が棒に当たったからムカついたとか意味わかんない事言ってたらしいし、やっぱり変だってあれは』

『確かに蒼司君は少し変わってるけど、それはマイナスじゃない。私は知ってるもの、蒼司君が優しい良い子だって事』

くだらない会話だ。

その会話は前に数回話した程度の女とそのダチがする暇つぶし程度の話。

俺が優しい？ 何を勘違いしてるんだあの女は。

アンタが俺の何を知っている？ 俺がアンタを犯した後も同じ事言えるのかよ？

『……………くだらねえ』

優しい良い子だ？

ふざけやがって……………

「……………お前って本当は優しい奴だろ？」

夢から覚めた俺の口は、勝手に動き、横の女にそつ声を掛けた。

「……………はあ？」

横の女、田宮はキョトンとした顔をした後、俺を睨み付ける。

俺は目を逸らさずに、真正面に見つめ返した。

「な、なによ？」

一年前。どうしようも無かった俺は綾さんに救われた。

だから、とは言わない。これは俺の暇つぶしに近い。

「お前は優しい奴だ。分かるよ」

「はああ!？」

田宮は席から立ち、顔を耳まで赤くさせ、俺を睨む。

「……………はは」

少し俺に似た奴。俺には作る事が出来なかった友達。

もし可能ならば、コイツに友達を作ってやりたい。

「な、何笑ってんだよ teme エ！」

何と無くそう思った

「……………お二人とも、授業中ですよ。先生困っちゃいますよ」

「うるさい…」

前途多難っぽいけどな。

とにかく話し掛ける

「おはよう」

「……………」

「今日はいい天気だな」

「……………」

「明日は雨だったよ」

「……………」

「明後日は晴れるらしいな」

「何なんだよ、うるさいな！」

五月中旬の朝。遅刻もせず毎日真面目に学校へ来ている田宮に、俺
だったら確実にぶん殴ってるウザさで朝の挨拶をする。

「昨日横浜のアイスを並んで食べたんだよ。うまかった」

「なんでいきなりアイスの話してんだよ！」

「マイ・ネーム・イズ・ソウジ」

「なんで英語!?!」

「ドラクエやった？」

「やってねーよ！ 頭おかしいのかテメエ!!!」

昨日購入したコミュニケーションマニュアルに書いてあった事をやっているだけなんだが、田宮の機嫌がどんどん悪くなって来ている気がする。拗ねてるだけか？

「……ふ」

そついや俺も始めは綾さんにこんな態度を取っていたな。

「わ、笑ってんじゃねーよ!!!」

「おつと」

殴り掛かってきた田宮の拳をかわし、逆に胸を揉む。これもコミュニケーションの一つらしい。

「っ!?!」

「良い乳してまんな。揉まれておっきくなっただんでっか？」

「~~~~~っ!?!」

その後すげえビンタが飛んで来たが、コミュニケーションは成功したんだらうか？

「……頼むぜ係長」

便所で腫れた頬を水で冷やししながら「コミュニケーションマニュアル、
【いつも心に係長を】を開いて読む。」

「…………ふう」

次はこれか。

二時間目、英語

「あゝ、ヤベー教科書忘れた見せてくれ」

「……………」

「見せてくれ」

「……………」

「見せてくれ」

「……………」

「見せ」

「勝手に見るよ!」

田宮は英語の教科書を俺に投げ付け、すげえ目で睨みつけて来た。

「ありがとう。どうだい授業サボって食堂で食事でも」

「死ね！」

三時間目、現国

「君の為に詩を作って来たんだ」

「は？」

「美しい人生を、限らない喜びを、この胸のときめきを」

「死ね！！」

四時間目、数学

「恋と数学は良く似ているね」

「……………」

「どちらにも式と法則がある。でもね、答は「死ねー！」

昼休み

「……………パンくわえた女とぶつかれた？ 何処に居るんだよ、んな奴」

パンをくわえながら屋上でマニュアルの一つ、【俺と彼女はこうしてステディ】を読む。

「ふむ……………ん？」

【意地っ張りで、気の強い彼女。そんな彼女にはこれだ！】

「……………マジかよ」

五時間目、歴史

「……………」

無言で田宮の横顔を、じっと見つめる。

「……………」

田宮は俺の視線を無視しているが、どこも無く落ち着きが無い。

「……………」

更に凝視。

「……………」

更に更に凝視。

「……………うっ、なんなんだよさっきから！」

「可愛いなお前」

「かわっ!?!?」

「お前見たいな奴、好きだぜ」

「な、ば、あ、うゝ！ い、意味分かんねえよ temeエ！ 馬鹿か！
？ 気持ち悪いんだよ！！」

「お前が好きだ」

「っ！？ し、知るか馬鹿！！」

田宮は赤くなつた顔を隠すように、俺へ背を向けたって、本当に「
コミュニケーションなのかこれ？」

「じ、授業中です……」

「あ、悪い。続けてくれ穂波先生」

「うう……。三代目將軍徳川家光は……」

「……コミュニケーションってのは、やっぱり難しいわ」

俺の呟きに田宮は僅かに反応したが、こっちを向く事は無かった。

放課後は付け回せ

「一緒に帰るぞ」

「……………」

「無言は肯定だよな。帰りどっか寄るか？」

「……………」

「隣町にうまい何かあるらしいぞ。連れてけ」

「あ~~~~うるさい！ ついてくるな！！」

放課後になり、そそくさと帰ろうとした田宮の後を追って誘ってみたが、どうもキレられているらしい。マニュアル通りにしてるってのに一体何が悪いってんだ？

「待てつて。駅前にもうまい立ち食いそば屋があつてな」

「一人で行けよ！ 私に構うな！！」

「まあそうなんだが」

一人で食いに行った方が良い。

「でもま、仕方ないから付き合えよ」

「絶対行かないから！」

田宮は早歩きで俺を振り切ろうとしたが、俺も早歩きで追跡。

その歩みは次第に小走りとなっていたが、俺も小走りで更に追跡。

「な、なんでついてくるんだよ!」

「お前と放課後を楽しむ為らしい」

「わ、私は楽しくなんか無い! ハア、ハア」

「俺も楽しくは無い」

「じ、じゃあ、どっか、い、行けえ〜!」

「それは駄目だ。予定が狂う」

マニュアルには今日中に放課後何処かに誘えとあるからな。

「なん、の、ハア、予定だよ! ばかあ!」

田宮は泣きそうな声でそう怒鳴った。

そしてその声で、田宮が本気で嫌がっている事に気付く。

「……………わりい」

俺は足を止め、田宮に頭を下げる。

「……………?」

そんな俺から少し距離を取った田宮は、様子を伺うように振り返った。

「悪かったよ。俺はコミュニケーションとか分からなくてな。お前が嫌がってるのに今、やっと分かった」

「……………」

「全くアホだな。これじゃダチなんか出来る筈ねえな」

親父やお袋が良く言っていた。俺には人の気持ちを思いやる心が無い欠陥品だと。

「欠陥品……………」

「ひっ!?!」

欠陥品。その単語を聞いて、田宮の顔色は真っ青になった。

「……………どうした?」

「わ、私は……………私は欠陥品じゃない!」

強い怒りを感じる視線と声。だが、小刻みに震える身体と怯えを含まぬ瞳の色が、それは強がりだと言う事を示している。

お前も言われた事があるのか? 近い人間から、その言葉を。

「……………お前は欠陥品なんかじゃないだろうよ。少なくとも俺よりは

遥かにマシな人間だ」

「……………何も知らないくせに」

「知ってるぜ。お前はきちんと学校へ出て授業を受ける真面目な奴だし、話掛けられて戸惑う気の弱い奴だし、相手を無視してしまつた事を悪いと思つている優しい奴だ」

「なっ!?! ば、馬鹿かテメエ!!」

……………似てんのかな、やっば。

「ま、ゆっくりと行こうぜ」

「は?」

「お前を改造してやるから」

「はあ!?!」

「目指すぞ、友達百人」

「かつてに話進めるな、馬鹿!!」

ありがとう（日本語）は意外と世界で通じるらしい

「よう、田宮。一緒に行こうぜ」

「……………」

改造宣言をした次の日の朝。

いつもと同じ様にチャイムの十五分前に登校して来た田宮を学校近くの公園で捕まえて、共に学校へと向かう。

「……………」

「……………」

捕まえたのは良いが、基本俺は余り喋らない。

今まで読んでいたマニュアルは捨てた。だから何を話せば良いのかさっぱり分かん。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………な、何か喋れよ！」

いつまでも続く無言の状態に田宮は息が詰まったのか、珍しく話し掛けてきた。

「なんかつつつても……………もうすぐ中間テストあるが勉強してるか？」

「……………少し」

「カンニングさせてくれないか？」

「だ、駄目に決まってるだろ！」

「そうか、駄目か……………」

「な、なんでそんなに残念そうなんだよ。……………テメエ、テストとか気にしてるのか？」

「いや。どうせ卒業後は就職だしテストなんかどうでもいいんだが、余り悪いと妹がな」

「妹、いるのか？」

「ああ……………いたよ」

今は別々に暮らしているけどな。

「あ、じ、じめん」

「何がだ？」

「え？ い、いや……軽率だった。ごめん」

「ああ」

よく分からないが、とりあえず頷いておくか。

「……私も兄がいたよ」

「そうか」

「……うん」

「……」

何かを言いたそうにしている。それは分かるが、何と声を掛ければ良いのかが分からない。

……ほんと分からない事だらけだ。

「と、着いたな」

ウダウダ考えていると、いつしか学校へと着いていた。

「……教室じゃ話し掛けてくるなよ」

「隣の席だし話すぐらい良いじゃねーか」

「良くないっ！」

「ケチだな」

「うるさい!!」

田宮は俺を振り切る様に小走りで校舎へ向かって行った。

「……朝から元気な奴」

低血圧の俺には真似出来そうに無い。

「ふう」

ため息を一つし、俺も田宮の後を追って校舎へと向かう事にした。

田宮より数分は遅れて入った教室内は、異様な雰囲気にもまれていた。

クラスの連中は俺と田宮を交互にのぞき見では直ぐに逸らす。

田宮はと言うと黒板を睨み見つけ、身動き一つとらず毅然と席に座っている。

「どうしたんだ？」

「……………」

横に座り尋ねるが、田宮はこちらを見もしない。

「何かあったのか？」

クラスの連中に話掛けてみたが、まるで無反応。

「田宮？」

「……………」

田宮もまた無反応だ。

「……………そうかよ」

今まで俺がしてきた事を考えれば、この反応はむしろ正常だろう。

俺は席に座り、いつもの様に机へ顔を伏せ…………

「てもいらねーか」

人を改造するってんなら俺自身も変わらないといけない…………気がする。マニュアルにも、んな事が書いてあったっばい。

「頼む。何かあったのだけ教えてくれ」

立ち上がり、記憶にある限り生涯三回目の頼み事を田宮やクラスの奴らにする。

だが返事など、どこからも無かった。

「……………」

頭下げて無視されて。その屈辱に体は震え、怒りが沸く。だが、この状況を作って来たのは俺だ。全く……情けねえな。

「……何があつたのかだけで良いんだ、誰か教えてくれ。……頼む」

「……………つ、机」

「え？」

窓際に居たクラスの……名前なんつったか、女が恐る恐ると言った風に俺へ声を掛けた。

まさか本当に返事が返って来るとは思わなかったので、反応に戸惑う。

「田宮さんの机に……」

「い、言うな!!」

今まで無視をしていた田宮が弾かれた様に立ち上がり、女を睨み付けた。

「い、いめっ」

「俺が聞いたんだ、お前は気にしなくて良い。それより……あ、あ……………あ、ありがとな」

な、何を礼なんか言ってるんだ俺は。綾さんにだって言った事ねーってんのに。

「へ？ …………… あっ！ は、はひー！ どういたまえましたー！」
女もテンパっちまって、あわてふためいちまったよ。

「…………… は…………… はっ」

ざわっ

俺の笑いにクラス内がざわめく。

「…………… 名前、何て言うんだ？」

ざわめきを無視し、俺は女に聞いた。

「み、宮川…………… です」

「宮川、な。覚えた。今度何か困った事があれば言え、一度だけ助けてやる」

何言ってるの？ クラス中、そんな空気だ。

だが気にしねえ。

「返事、嬉しかった。ありがとう」

次の礼は、自分でも笑っちまうぐらい素直に言えた。

どうやら俺は返事が返って来た事に対して浮かれているらしい。田宮の事なんぞ忘れちまうぐらいに……………

「と、それじゃ意味がねえだろ。……机がどうじたんだ田宮？」

「……………え？」

田宮は最初、俺達を呆気にとられた顔で見えていたが、我に返ったのか急いでしかめっ面を作り、怒鳴る。

「テ、テメエには関係無いだろ！」

「あるぞ。良いから話せや」

「ば、馬鹿！ こんなに注目浴びてんに話せるか！！！」

「なら屋上行くか？」

「そついう問題じゃねえよ！」

「……………やっぱり女は分からねえな」

綾さんといい、こいつといい。

「女とか関係なくテメエが一番分からねえ事に気付け馬鹿！」

んな捨て台詞を吐き、教室を出て行くこととした田宮の肩を捕まえる。

「っ！？ は、離せ！」

「もうすぐ授業が始まるぞ。俺が出てくからお前は勉強してる」
屋上でも行ってみるか。

「……………ほんと何なんだよあいつ」

廊下に出た俺の耳に、田宮のそんな独り言が聞こえた気がした。

傍から見ると、いじめっ子は格好悪い

「それでその……田宮さんの机や黒板に……そ、その何て言うか田宮さんは凄くエ、エッチが好きとかそんなような事が書かれててその……」

「エッチ好き？ ヤリマンってやつか？」

「じ、言葉にしないで〜」

宮川は、真っ赤になった顔を隠す様に両手で塞いだ。

「ヤリマンねえ」

んな事、どうでもいいじゃねーか。

「それより悪かったな。ずっと待ってたんだろ？」

今は放課後。下校時のチャイムの音で、ようやく目を覚ました俺を、誰も居なくなった教室で宮川は一人待っていた。

「うん……。話しの途中になっちゃってたから」

「律儀だな」

「律儀……違うと思う。私が勝手に話してる事だし……」

「そういう所、やっぱり律儀だと思うぞ。とにかく話の内容は分かった」

「……うん。田宮さんを助けてあげて」

「ん？ 助けろって言われても困るが……分かったよ」

今にも泣きそうな宮川の顔を見て、俺は頷く。

「うん……。私、そろそろ帰るね」

「ああ……。ありがとな」

「……うんっ！」

俺の言い慣れない礼に、宮川はニッコリ笑い、教室を出て行った。

「助けてくれ……か」

どうすれば良い？

書いた奴を探してシメれば良いのか、それとも気にするなと慰めれば良いのか……

「……分からねえよ」

アンタなら分かるんだろうけどな、綾さん。

ま、取り敢えず帰って飯でも食って寝るか。考えんのはそれからだ。

その後は、アパートに帰って飯食って寝た。正直田宮の事なんざ、余り考えて無かった。そして次の日。田宮に対しての嫌がらせは露

骨なものになっていた。

牝豚。死ぬ。公衆便所。思い付く限りの中傷が、油性のマジックで田宮の机や椅子にビッシリと書き込まれている。

「ひでーなこれ」

「流石にヤバくない？」

クラスの連中は田宮に同情的だったが、進んで関わるうとはせず、遠巻きに眺めているだけだ。

まあ、俺も似たようなものだが、当の田宮は何事も無いかの様に一時間目の授業の予習を黙々としている。だが、そこに強さは無い。むしろ今にも折れちまいそうな弱さを感じた。

「……田宮」

「……」

「俺の椅子と机やるよ。あんま使ってねーから、綺麗だぜ」

「……」

「お前の机、耳無しの坊さん？ あれみてーで渋いから交換しろ」

「………といてよ」

「あ？」

「ほつといてよ！」

田宮は両手で机を強く叩いて立ち上がり、その勢いのまま、教室を出て行った。

「……………」

良く分から無いが、多分俺はまた失敗したんだろう。その失敗がなんなのか思い付く事すら出来ない俺に、田宮を追う事は出来ない。

俺はクラスを包む思い沈黙の中で、田宮の机と俺の机を交換し、教室を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9332h/>

転校生改造宣言

2011年11月17日10時08分発行